

博士論文 要旨

人間文化学研究科 歴史情報論講座 地域文化論専攻

博士後期課程 3 年次生 張 煜

論題：日中歴史教科書に関する比較研究—近現代史記述を中心に—

全体構想：

序 章 共通歴史認識形成への試み

第 1 章 政治問題化する歴史教科書

第 2 章 現代日中歴史教科書編纂方針の比較

第 3 章 現代日中歴史教科書にみる近現代日中関係史

第 4 章 日本の歴史教科書が描く近現代の戦争・事変

第 5 章 建国後の中国歴史教科書が描く近現代日中関係史

終 章 歴史教科書の位置付け

序章 共通歴史認識形成への試み

日本と中国の間で、同一の歴史を体験したものの、共通の歴史認識は果たして形成できるのか。序章では、民間側の「日中韓 3 国共同歴史編纂」と政府側の「日中歴史共同研究」を代表に取り上げ、過去の努力成果から分析してみた。その結果、以下のような問題点を抽出することができた。

- ・不可避な自国中心の叙述スタイル
- ・「並行」・「併記」の問題
- ・「歴史事実」の共有と「歴史認識」の共有の問題

長期にわたって今日に形成した自国史の叙述仕方の枠組みを乗り越えることが安易ではない。記述スタイルの差異と衝突は最初から不可避であった。一つの歴史事実に対し、「歴史事実の認識」の共有ができたとしても、そこから立ち上がる歴史観は根本的に違っている。共通歴史認識を形成することや統一の歴史教科書づくりというのは、幻想でしかなかったと指摘できる。

このような現実を踏まえ、両国の歴史認識を端的に示している歴史教科書の叙述を比較し、両方の見方を直視することが不可欠だと考えた。

第1章 政治問題化する歴史教科書

1982年6月26日、各新聞社はいっせいに、文部省(当時)の1981年度検定によって、高等学校日本史教科書で、いわゆる「日中戦争」における「侵略」という記述が「進出」に書き替えさせられたと報じた。これを発端に、中国との外交問題に発展し、国際批判が高まった。

なぜ、歴史教科書、特に日本史教科書の記述をめぐって外交問題にまで発展したのか。歴史教科書を再度確認する作業が必要だと考え、戦後の中学校・高校の日本史・歴史教科書を博搜し、そこで使用される「進出」「侵略」表現を収集し、その表現の変遷をあとづけてみた。このような作業を通して、以下のようなことが分かってきた。

戦後策定された『学習指導要領』では、戦前から使っていた軍隊用語ともいえる「進出」という用語をそのまま継承して使い続けてきた。教科書問題を受け、出版社は一斉に改訂作業が行なわれたと従来一般的に認識されているが、実際、中学校の歴史教科書記述は、政治問題化する前の段階ですでに改訂が行なわれていた。つまり、1977年の中学校学習指導要領の公示を契機にして、中学校歴史教科書においては「進出」の語から「侵略」の語に変化しつつあった。

それに対して、高校の場合は、戦後直後から使用されていた「進出」の語が踏襲されていた。1982年の教科書問題を分水嶺に、政治的・外交的配慮から改訂が行なわれ、高校教科書においても「進出」という言葉を「侵略」、「侵入」に機械的に変更されたことが分かった。それゆえに、「侵略」という語の使用がもつ本質的な概念を理解することが困難になり、ひいては日中間の歴史認識に埋め難い溝が引き継がれている。

第2章 現行日中歴史教科書編纂方針の比較

第2章から、現代の日中両国の歴史教科書に注目した。両国とも、国・政府が規定する編纂方針に準拠して教科書を編纂している。両国の教科書はそれぞれどのように作られ、歴史教育の方針はどのような違いを示すのか、第2章においては、教科書ができあがるまでの過程を明らかにしてみた。

中国と日本の教科書作成は、いずれも検定制度を採っている。検定から採択まで両国の行政機構が介入しており、政府の教育方針が教科書編纂と直接関連している。中国教育部は『歴史課程標準』（以下『歴史課標』）、日本文部科学省は『学習指導要領』（以下『指

導要領』を作成し、歴史教科書編纂の基準を定めている。歴史課程に関して、両国の教科書編纂の方針に、大きな相違を示している。

- ・「情感态度与价值观」を重視する『歴史課標』と「国際環境」を強調する『指導要領』
- ・「历史经验教训」を学ばせる『歴史課標』と「事実の正確な理解」を重視する『指導要領』
- ・「侵华日军的罪行」を学ばせる『歴史課標』と「多面的・多角的に考察」させる『指導要領』

というように、両国歴史教科書の編纂方針は劇的に違っている。このような編纂方針に基づいて作り上げた歴史教科書は、具体的にどのように叙述していくか、第3章で詳しく検討している。

第3章 現代の日中歴史教科書にみる近現代日中関係史

現代の日中歴史教科書は、どのように近現代の日中関係史を描くのか、第3章において具体的に見つめる作業を行った。

日中両国の高等学校で使用する現行の歴史教科書（採択率の高いもの）、「日本史B」（6種）及び「歴史必修1」（4種）を素材にした。両国の近現代史に関する歴史認識のギャップは、色濃く歴史教科書に反映している。

日本の歴史教科書は、日露戦争（日俄戦争）が、「国際」関係の位置付けとして重視され、記述量も多い。いわゆる「日中戦争」（抗日戦争）の記述量は、まったく逆の現象が生まれている。一方、中国の歴史教科書は、母国の危機的状況が深刻になる時期として、甲午中日戦争（日清戦争）、抗日戦争をとりわけ重視している。しかし、日露戦争に関する記載はまったくない。

日本の歴史教科書は、あらゆる関係事項を網羅し、歴史事実をできるだけ提示していく。客観性を非常に重視しており、歴史的評価を一切行なわないのが教科書のもっとも大きな特色である。一方、中国の歴史教科書は、自国がどのように列強に侵略され、そして、苦難や屈辱をうけた中国人民がどのように奮起して侵略に立ち向かい、抗争を行い、最後の勝利に至ったのかという一つの道筋をもって記述している。教科書にはすでに一定の価値観が決められており、歴史事実より、その歴史観・価値観を学ばせるのが重点となっている。

第4章 日本の歴史教科書が描く近現代の戦争・事変

現代につながる日本と中国の歴史教科書はどのように進化してきたか。第4・5章は教科書の変遷の部分を見ていくことにした。

近代に入った日本は、ほぼ半世紀にわたって、戦争や戦争状態が続いていた。日本の歴史教科書では、この「戦争の時代」をどのように記述してきたのか。この章では、歴史教科書記述の変遷を、1945年の敗戦とその後のGHQによる占領時期を分水嶺とし、それ以前の記述と、それ以降現在までの記述と、何が違い、何を継承していくのかを分析した。とりわけ、戦争・事変がいかなる理由で開始されたかという部分に着目しながら、日本史教科書が描き出す対外戦争像を探ってみた。

戦前の歴史教科書が描く対外戦争は、出兵・開戦の正当性を開戦の詔書、政府発表に掲げた文言をなぞったように、戦争の理由付けとして記述する点が、戦前教科書の大きな特色として指摘できる。

1945年日本の敗戦以降、占領下で急遽作られた新しい歴史教科書『日本の歴史』は、戦前の大義名分、理由付けが否定された結果、CIEの方針に寄り添い検閲をくぐり抜けるため、客観的な事実だけで書いていかざるを得なかった。

占領下に作られた教科書を原点にして登場する検定教科書が描く近現代の対外戦争は、占領下の『日本の歴史』が提示した客観的記述を重視する特徴を受け継ぎ、一貫して客観的に事実だけ記述していく。このように、近現代の対外戦争の理由付けという、ごく限定した切り口から日本で約100年にわたって編集され続けた日本史教科書の叙述を見つめてみた。

第5章 建国後の中国歴史教科書が描く近現代日中関係史

前章では、日本の歴史教科書が近現代の対外戦争をどう描いてきたのかを検討してみた。この章では、日清戦争以降侵略される側として認識をもつ中国は、対外戦争をどのように記述してきたのかを分析することにした。

国家体制の移り変わりに伴って、歴史教育の方針も変化してきた。国家体制と政策が大きく変転するなかで、中国の歴史教科書の位置付けはどう変わっていくのか。なかでも現在の中国建国の礎と位置付けられている抗日戦争を中心とした日中関係に関する記述に着目して分析を行った。そこで、新中国成立後、代表的な教科書出版社である人民教育出版社の歴史教科の変遷を、新中国成立期、改革開放後、そして、21世紀に入った以降、と三

期に分けて検討した。

そこで、建国初期から現在に至る歴史教育の変遷のなか、中国人民が日本の侵略をはねのけ最終的に新中国の成立までたどり着くという国家成立の基本方針は、一貫して堅持され続けきた。これをもとに作られてきた教科書が描く近現代日中関係史は、一本の筋が通っており、根幹が揺らがず、時期によって強調する内容に変わりを見せた。

第1期の教科書で描かれる日中関係史は、「闘争」を中心に展開された。外国による侵略に対抗する中国人の「革命」、「反抗」をより詳しく記述する特徴が見られる。

第2期は、教科書記述を強化していく時期である。とくに、抗日戦争中の日本の残虐行為について具体性を示すようになっている。このような描き方は単なる侵略性を教えるのではなく、「中国人民による困難な奮闘」という点を引き出し、愛国教育が図られた。

第3期の教育改革のなか、教材としての歴史教科書の位置づけを重視する新歴史教科書の創出が図られた。教科書は詰め込み方式を変え、代表的な歴史事象を選出することにとめた。そのため、日中関係史記述のなかに、日本の多くの犯罪行為が教科書から消え、代表的な事例を愛国教育の基本的な教材として提供された。

終 章 歴史教科書の位置付け

終章では、各章で検討した内容を振り返えながら、本研究の総括を行った。

客観的な歴史事実を教える日本歴史教科書と、国家の歴史観を教える中国歴史教科書は、相容れないかたちで作られており、位置づけと基本方針は根本的に異なっている。終章では、教科書をもとに両国で作成されている授業案（日本：「学習指導案」、中国：「教案」）を例示にあげ、両国の教え方にも大きな落差を呈していることが指摘できる。

最後、本論文で提示した結論や考え方を踏まえ、授業案の蒐集・分析、及び教育現場での検証を今後の課題としてあげた。